

當麻曼荼羅攷

松 永 知 海

はじめに

日本浄土教において、その美術遺品は夥しい数になるが、そのなかで方四米におよぶ絹本、極彩色といわれ、天平宝字七（七六三）年の成立という説話をもつ原本當麻曼荼羅はその嚆矢というべきものである。原本は現在国宝に指定されておりその拝瞻は許されていないが、鎌倉期以降の転写模本により、その彩色を伺い知ることができ、またおおまかな構図を写真で知ることができるのである。

この原本當麻曼荼羅についての歴史・美術史からの検討は従来よくなされており、それらの成果を概説すればつぎのようである。

- (1) 製作事情についてその製作年代がわからないこと。さらに製作地についても中国織説・日本織説とあり、いづれもその決定をみないこと。
- (2) 当初の仕立て方は当時の通例に従って絹の裏地をあてがって袷仕立てとし、上部には乳を縫い付け、『建久御巡礼記』に記すように筋のない竹を軸として乳に通し、厨子内に吊り下げたものと推定されること。
- (3) 現在のような軸装に改められたのは延宝五（一六七七）年の修理の結果であること。

(4) 製作事情に關する初出のものは、『建久御巡礼記』(一一九一年)であり、その頃すでに二つの説話をのせてその成立事情がわからなくなっていること。その一つは、縁起によって、麻呂子親王夫人の発願により、天平宝字七年六月廿三夜に化人が現われて蓮糸を以て菱相を織る話であり、いま一つはヨコハギノ大納言の娘が極楽を願ひ曼荼羅を写そうとし、その時、一化人が一夜にして織るという、寺僧の話を載せているのがそれである。

このように原本當麻曼荼羅の成立は伝説的要素が強いのであるが、鎌倉期に証空が出るや多くの転写図がつくられ、また當麻曼荼羅に対する註釈書が多数著わされてきた。この絵画を註釈するという註釈書は、中国では書かれなかったようであり、日本浄土教における一つの特色といつてよいであろう。これは法然門下の証空よりはじまることであり、彼は自らの浄土教の根本に當麻曼荼羅の解釈をおくのである。その著として西山浄土宗に伝わる『當麻陀羅注』(現在の研究では証空の真撰ではなく、門下の手になるものといわれる。)の冒頭は

竊以弟子^レ轉入^ニ大谷^ニ先師上人^ニ禪室^ニ多年學^ニ念佛^ヲ法門^ニ已來^ニ上人^ニ滅後^ニ雖有^ニ其^ニ不審^ニ無^ニ可^ニ決聖人^ニ而空^ニ送^ニ歲月^ニ之處得^レ拜^ニ此^ニ變相^ニ。如^レ遇^ニ先師上人^ニ。如^レ謁^ニ高祖和尚^ニ。淨土一宗^ニ釋義^ニ不審^ニ悉^ニ晴^ニ世間出世^ニ作法^ニ由來彌^ニ覺^ニ之^ヲ。……參^ニ詣^ニ彼^ニ當麻寺^ニ靜^ニ拜^ニ此^ニ變相^ニ。是非^ニ觀經曼荼羅^ニ。即憶^ニ織^ニ善導和尚^ニ觀經^ニ疏四卷^ニ文義^ニ……右^ニ緣^ニ名^ニ序分義^ニ觀經疏爲^ニ二^ニ之卷^ニ。左^ニ緣^ニ名^ニ定善義^ニ是三^ニ之卷^ニ也。下^ニ緣^ニ名^ニ散善義^ニ則疏^ニ四^ニ卷也。中央八重名^ニ玄義分^ニ則一^ニ之卷^ニ也。

といつてはじまる。証空(門下)はここにおいて當麻曼荼羅は亡き法然や善導に会えるようであり、淨土一宗の釈義の不審がそれを拝瞻することにより悉く晴れたと述べている。そしてこの曼荼羅が善導の觀經四帖疏の文義に一致することを述べてこの當麻曼荼羅を註釈しているのである。

この証空（門下）の態度は當麻曼荼羅を研究する上に大変示唆にとんでいる。まず第一は法然の教えを理解するには、本来その御文なり、他の宗典をもつて理解すべきであるのが、ここでは絵である曼荼羅によっていること。

第二はその根拠づけとも考えられるが、曼荼羅の絵相が法然が師とも仰ぐ善導の『四帖疏』に依つて作製されていると考えたことである。本来文義があつてそこから絵が描かれる、つまり文を解釈していく上の補助手段として絵相をみるのであるが、ここではそれが逆転して絵相から文義をたしかめているのである。今日の研究成果によって両者の関係は、當麻曼荼羅の絵相のなかに、『四帖疏』によってはじめて理解できる部分があるが、本来善導と當麻曼荼羅とは直接結びつかないのである。一見同じようであるがこの二つの立場は八文↓絵・絵↓文∨の重点の置き方に根本的な相違がある。証空はまず絵、つまり當麻曼荼羅をもつて文を理解したのである。

これから述べようとする當麻曼荼羅研究の出発点はじつにこの絵と文との相関関係を、當麻曼荼羅研究者の著書とその遵守した絵相との間で明らかにしようとするところみである。

註

④『大和古寺大観』第二卷當麻寺。河原由雄氏論稿。

一

ここにおいては、江戸時代浄土宗を代表する学僧のうち義山・観徹の二人が當麻曼荼羅をどのように用いていたかを明らかにしてみたい。

○

義山（一六四八—一七一七）の業績についてはいまさら述べるまでもないが、その浄土宗典籍の校訂出版と著述

との間には密接な關係が認められる。そのうち當麻曼荼羅については、後者に『當麻曼陀羅述獎記』四卷・『三部經隨聞講錄』十二卷、前者に『淨土三部經』・『五部九卷』がある。

『當麻曼陀羅述獎記』は、知恩院第四十二世秀道の命をうけ、画業をよくする無塵居士とともに大和當麻寺に原本をはじめとする曼荼羅を拝瞻した上、図相入りで元禄十六年（一七〇三）に出版されたものである。それは同時代の貞極（一六七七―一七五六）によっても高く評価される所である。それから三年後、宝永三年（一七〇六）に義山は華頂山において三部經を講述した。その受講者見阿素中によって享保十二年（一七二七）に『隨聞講錄』として編纂された。

この『隨聞講錄』のなか、『觀無量壽經隨聞講錄』を例にとって當麻曼荼羅を引用する記載を調べてみると、それらは二つに大別できる。

A 經文を解説し、さらに付け加えて、曼荼羅の図相で説明したもの

B 『四帖疏』の文と當麻曼荼羅の図相とが一致することを指摘したもの
このうち、A群に属するものとしては八例ある。

① 在虛空中者韋提宮中、狹少ナレト佛來赴玉フト宮殿忽滅廣潤タル虛空成也。是如來威神力故也。然曼陀羅變相於此處無宮殿只虛空ナルハ但有築牆並門無此經文模樣也（淨全14卷 555頁上、下）

② 號泣者ナキサケブ聲也。號人哭スル也。泣無聲出涙也。此時夫人悶絶婉轉不具威儀也。曼陀羅

變相傍有侍女看病體相畫リ

（淨全14卷 556頁上）

③ 以黃金繩者此亦無量繩アルベシ……私云當麻變相引繩立道筋如キモノアルナリ亦或云密家五色界道類皆以繩定界分今亦如是（淨全14卷 584上）

④ 乘寶蓮花隨化佛後、者乘^ニ觀音^ヲ手中、蓮花^ニ而隨^ニ佛後^ニ、合讚師云、予拜^ニ瞻^{スル}當麻變相^ヲ下六品、蓮皆成^ニ含華^ヲ、而在^ニ佛後^ニ可^レ見^ル。

(淨全14卷 677上)

⑤ 妙眞珠網、者以^テ糸^ヲ編^ニ眞珠^ヲ臺上^ニ注連^メ張^ル如^クスル也。當麻變相、蓮心上^ニ房樣ナルモノ有^リ。其替網懸^ル事。扱網、字懸^ニ上^ニ諸寶^ニ也。西山並^ニ秘決^ニ等變相連^ル花臺上^ニ懸網也。

(淨全14卷 603下)

⑥ 有五百億等、者當麻變相華座臺上有^ニ十如意珠^ニ是識顯^ス今五百億^ニ即以^レ少示^ス之。

(淨全14卷 604上)

⑦ 頂有肉髻者……此等論釋曉知、頂骨涌起之處即是肉髻。然瞻^ニ世佛像^ニ於^ニ其頂上高低之中際^ニ安^ニ一小赤珠名爲^ニ肉髻^ニ。……因辨當麻變相不^ニ別顯^ニ肉髻^ニ其外處々々靈像亦多^ク無^ニ別肉髻^ニ此所謂^ニ以^ニ頂骨即肉髻^ニ故也。

(淨全14卷 621下~622下)

⑧ 住立空中者、疏明^ニ彌陀在^ニ空^ニ而立^者但使^中廻心正念^ニ願生^ニ我國^ニ立^ニ即得^セ生^ル也……若^シ今日有^ニ修觀行者^ニ至^ニ觀成時雖^モ縱^モ不^レ拜^ニ見住立^ニ三尊^ニ必^ズ不^レ可^ニ狐疑^ニ韋提^ニ在世^ニ得益^ニ不待時^ニ機故^ニ散心^ノ位^ヲ拜見^{シテ}滅後^ノ衆生^ハ不^レ可^ラ然^ル。……此義唯局^ニ韋提^ニ不^レ可^ラ有^ニ末世衆生^ニ其證據當麻曼陀羅衆生定散二機^ニ本尊也。爾於^ニ第七觀處^ニ不^レ織^ニ住立三尊^ニ圖并銘文^ニ也。

(淨全14卷 599上~600上)

B 群に属するものとしては次のものがある。

⑨ 白言世尊者……疏夫人婉轉涕哭^{スルヤ}量久少^ク惺始^{メテ}正身^シ威儀^ヲ合掌^{シテ}白佛^ニ已上此暗符^ニ合曼陀羅變相^ニ變相^ニ有^ニ威儀具足^ニ夫人與^ニ不具足^ニ夫人之二人^ニ是^ニ其由也。誠疏妙釋不可思議^{ナリ}。可^ニ仰信^ニ也。

(淨全14卷 556上)

⑩ 自下大文第二正宗文謂序正分科諸師異說……今家分科冥合^ニ曼陀羅變相^ニ證定指授^ニ妙釋仰尚^ニ可^レ信^ス焉。扱諸師意存^ニ十六皆定^ニ今家不^レ爾^ニ答請十三定善自說散善九品亦是^ニ冥合^ニ變相^ニ。

(淨全14卷 575上~下)

また散善義のはじめの所においても、

今家、意相^ハ從上觀^{スルガニ}故云^ニ是名上輩等^ト法體^ハ全散善^{ナリ}。十三定善^ト九品散善^ト分^ハ之一^ハ一家證定指授^{ナリ}、妙釋^{ナリ}。況^ヤ亦冥合^ニ曼陀羅變相^一。

(淨全14卷 640上)

という、同様の記述がある。これは曼荼羅に向い右側に定善を描き、下側に散善を描くように十六觀を分けて描くということである。

⑪ (日觀)三障者如^レ次重次輕罪也。記主^ニ云若^シ有^ル重罪者^ハ即現^メ黑障^ヲ覆^フ所現^ノ日^ヲ如^シ三世^ノ黑雲^ノ障^ヲ日^ヲ。若^シ有^ル次罪^者者^ハ即現^メ黃障^ヲ覆^フ所現^ノ日^ヲ如^シ二世^ノ黃雲^ノ障^ヲ日^ヲ。若^シ有^ル輕罪者^ハ即現^メ白障^ヲ覆^フ所現^ノ日^ヲ如^シ二世^ノ白雲^ノ障^ヲ日^ヲ。記^一卷^一因^ニ可^レ有^ル曼陀羅變相^ニ沙汰^一。

(淨全14卷 578上)

この「曼陀羅變相沙汰」というのは、聖聰が『當麻曼陀羅疏』で指摘することく、この三雲が『四帖疏』に基づいて描かれたことを意味している。

⑫ 分爲十四支^ト者今家意^ハ取^ハ廻^ル本池^ヲ渠^ヲ云^ニ十四支^ト……疏^ニ池分^ニ異溜^ヲ旋還^ノ无^ト亂釋^ル此意也。溜^ハ爾雅^ニ云小流^{ナリト}曼陀羅^ニ左邊第十二普往生觀^ニ變相符^ニ合^ス疏文^ニ可^レ仰可^レ信。

(淨全14卷 594上)

以上、『四帖疏』の文と曼荼羅の図相が符合するという記述を抜出したのであるが、A群、B群の引用が『隨聞講録』という書物の性格、つまり義山が浄土宗宗侶に対し、『三部經』を講義したその講録であるということを考へると、つぎのごとくいえよう。

- ① A群⑧の例のように、經文を解釈する時、當麻曼荼羅を引用して絵証としている。
- ② B群⑨⑫の例のように、疏文と絵相の一致を指摘し、「可^レ仰可^レ信」といふ當麻曼荼羅を宣揚する。
- ③ A・B群から、『四帖疏』を図相化したものが當麻曼荼羅であると考えていた。

④ 故に、義山にとって曼荼羅は布教教化の手段だけではなく、教学上『四帖疏』を読む場合の資料として活用すべきものであった。

○

観徹（一六五七一―一七三一）は義山より九年下、その著述した『三部経合讃』は、素中が『隨聞講録』を草稿した時、対校に用いられたように、その注釈には定評があり、広く読まれたものである。

『観無量寿経合讃』には三ヶ所、當麻曼荼羅が引用されている。そのうち第十三・雜想観の、

観世音菩薩及大勢至於一切處身同衆生但観首相知是観世音知是大勢至

という文に注解して、観徹は、

観音若シ八尺ナラハ勢至モ亦八尺ナリ。故ニ身同シト云フ。斯レ大身同シヲ以テ小身同シヲ知ラ令ム。或ハ三身等同ナリ故ニ身同シト曰フヘシ。按スルニ此ノ義ハ當麻変相、当観ニ於テ等身ノ三尊ヲ織ルニ符合ス。応ニ知ルヘシ。

という。

この箇所「身同衆生」は、中国語本来の訓み方からすれば「身同衆生」と訓むべきで「観世音菩薩及び大勢至、一切處に於いて、身、衆生に同じ。但、首相を観て、是れ観世音と知り、是れ大勢至と知る。」と訓むところである。それは慧遠・元照という善導に前後する注釈家の訓むところである。

しかし、善導はこの箇所を釈して、

八從^ニ観世音菩薩^ニ已下正明^{ハク}指^{シテ}同^{スルヲ}前觀^ニ。佛大^{ナレハ}侍者^モ亦大^{ナリ}。佛小^{ナレハ}侍者^モ亦小^{ナリ}。九從^ニ衆生但觀首相^ニ已下正明^{ハク}勸^ス觀^ニ。二別^ニ。云何^ニ二別^ニ。觀音^{ナル}、頭首^{ナレハ}、上^ニ有^ニ一立^{ナリ}化佛^{ナリ}。勢志^{ナレハ}、頭首^モ之上^ニ有^ニ一寶餅^{ナリ}。

というように、「観音・勢至の二菩薩が一切處に於いて身が同じ」と区切り、「衆生が但二菩薩の首相を觀て觀音と知り、勢至と知る」ことができる」と訓んでいる。この善導独自の訓みをうけて觀徹はこの箇所を當麻曼荼羅の絵相を引用してその論拠としている。

觀徹の論拠である等身、三尊については、原本の當麻曼荼羅が不鮮明なため客觀的評價は下し得ないが、それについては聖聰がすでに、^④

不審抄問今曼陀羅織池^ニ中^ニ三尊^ニ其長齊等何義耶。答世間皆思長等^ニ而成^レ義今拜^ニ本曼陀羅^ニ取^ニ其長短^ニ寸方^ニ中尊^ニ五分高脇士五分短中尊螺髮^ニ二士寶冠^ニ故大方似^レ等然而實長短五分也。而代皆云三尊齊等^ニ是僻見也。已上^ニ不^レ今私西云有人所判愚所見全同。審抄

というように等身三尊を否定している。また義山もその解釈を『觀經隨聞講錄』で、^⑤

身同者觀音若八尺勢至亦八尺故云身同^ニ斯乃以^ニ上^ニ菩薩觀說^ニ大身同^ニ令^レ知^ニ今^ニ小身同^ニ此^ニ二菩薩身量^ハ程好中尊^ニ相應^ニ現^ニ給^ニベシ。トカク中尊可^レ高也。

といい、中尊が二脇士より高いことを言っている。

この義山・觀徹の相違点は『四帖疏』にいう「佛大^{ナレハ}侍者^モ亦大^{ナリ}佛小^{ナレハ}侍者^モ亦小^{ナリ}」の文の解釈が相違するためである。この部分を觀徹は「等身三尊」といい、義山は「程好中尊^{ホトヨク}相應^ニ」と解釈する。

いずれにせよ、觀徹もまた義山と同じく、當麻曼荼羅をもって、經典解釈の一助としたのである。

この他觀徹は、第四樹想觀に二箇所、^⑥（傍。筆者）

一一樹^ノ上^ニ有^ニ七重網^ノ。

諸天童子自然^ニ在^ニ中^ニ。

などの説明に當麻曼荼羅を引いている。

このような、觀徹の當麻曼荼羅に対する態度は、正徳二年（一七一二）に觀徹著『智光清海二曼荼羅合讃』に義山が寄せた序のなかに、つぎの文があることから窺えよう。

恒に彼の三変（當麻・智光・清海の三変相）を壁にして称仏の助業とす。

○

以上、江戸中期を代表する義山・觀徹の二人が、『觀無量寿經』を理解するときに、當麻曼荼羅を引いて解釈するということがあることを示した。

その背景には、法然が「偏依善導一師」といい、さらにその善導の『觀念法門』には「浄土变相を画くことの功德」が説かれていることが考えられる。その故に、『四帖疏』の文に一致し、天平宝字八年という善導没後八十二年ほどしか経過していない時期に出現した靈像であると伝えられていた原本當麻曼荼羅を、教学の立場から受け入れたのであろう。

註

- | | | | |
|---|------------------|---|-------------------------|
| ① | 『浄全』13卷55頁下。 | ④ | 『浄全』13卷562頁上。 |
| ② | 『觀無量寿經合讃』末・十八丁ウ。 | ⑤ | 『浄全』14卷638頁上。 |
| ③ | 『浄全』2卷53頁下。 | ⑥ | 『觀無量寿經合讃』本、四十五丁ウ・四十六丁オ。 |

二

江戸期の浄土宗においては、當麻曼荼羅に多くの研究書が著わされ、またその転写・印行がなされた。このこと

は、法然が直接當麻曼荼羅に言及しなくても、前節で述べたように善導とのかかわりによって後世の人々が曼荼羅を鑽仰したこと証左である。このように『四帖疏』と曼荼羅とを結びつけて理解することは宗内において早くからおこなわれていたようで、その『四帖疏』と曼荼羅が符合することを『法然上人行狀図』巻六にはつぎのように述べている。

かの當摩寺の曼荼羅は、彌陀如來化尼となりて、大炊天皇の御宇、天平寶字七年にをりあらはし給へる靈像なり。序正三方の縁のさかひ、日觀三障の雲のありさま、人さらにわきまへかたかりしを、のちに文徳天皇の御宇、天安二年に、もろこしよりわたれる、善導大師の御釋の、觀經疏の文を見てこそ、人不審をば、ひらき侍しか、天平寶字七年より、天安二年にいたるまでは、九十六年なり。そのかみ吾朝にて、をられたる曼荼羅の、はるかの後にわたれる、觀經の疏の文に、符合せるをは、不思議とこそ申傳て侍れ。

換言すれば『四帖疏』によって當麻曼荼羅が描かれているという信仰こそが江戸期の曼荼羅研究者の輩出にもつながったと考えられる。しかし原本當麻曼荼羅が『四帖疏』に一致するといっても、その図相は大変いたんで鎌倉期にはすでに不鮮明な部分があったのであるから、どの図相が原本を伝えているかということは各人によって異っていた。聖聰の時代にも九品段図相においてかなり違った図相があることを伝えている。江戸期の研究者にとってはおさらどの本を正図とするかに意見が分かれた。大順はそれらを比較研究し分類したが、そこでもはたして各図相がどの程度相似し、相異なるのかふれられていなかった。そこでこの節では浄土宗内において研究者依用の曼荼羅図相を比較するための基礎作業として各研究者の依用本を検討したい。

○

良定（一五五二—一六三九）は慶長十九（一六一四）年に『當曼白記』十二卷を著わす。本書の書誌的考証は「袋中上人著述目録並解題」（『琉球神道記』四四四頁）に詳しいのでそれにゆずるが、そこに未見という慶安版を検すると、刊記は

慶安元戊子歲仲冬吉辰／枚田勘兵衛尉刊行之

となっており、当然のことながら寛文十一（一六七二）年の東暉の跋もない。東暉の跋に「校合、改^{シテ}舊本^ニ畢」とあり、たとえば卷三・二十丁オ三行目の「^{カレン}關廁^{カワヤ}は^{カワヤ}團廁^{カワヤ}（檀王法林寺藏草稿本は團の字につくる）」となっている。

良定は『白記』を著して後、寛永九（一六三二）年に當麻曼茶羅の板木をほらせている。これは檀王法林寺に蔵されており、三枚の板を合わせて、たて八九・一糎、よこ七三・七糎の大きさである。この板木はそれをすっぽり包む観音開きの厨子に収められ、そのあけて右の扉には「南無釈迦文佛」、左の扉には「南無阿彌陀佛」といづれも良定の手になるものを陰刻し、その文字を金色をもって彩色している。この板木^①の詳細な図相については、刷られたものを見ることができないのはっきりといえないが、九品段における来迎図相の阿弥陀仏は上品を除きいずれも立像になっており、またその眉間から往生人に向って光の筋があった。これは大順がいうところの古図の特徴である。しかしながら大順のいう古図と『白記』に説く図相とは同一でない。たとえば上品において『白記』は「往生人（僧形）と一童子を描くのに対し、古図では一往生人と一男一童を描いていることをあげることができる。ところで檀王法林寺には良定の弟子東暉（一六二三—一六八二）の代に寄進された當麻曼茶羅が一鋪ある。そのうらには製作の因縁を墨書しているのであるが、それは良定三十三回遠忌の年につくられている。その時四十八日^④

間の別時念仏を修し、白記を講説して、それを聴聞する人々は雲集の如く結縁せしむという。この曼荼羅は九品段においては文亀本（新図）によらず、『白記』と同じく古図の図相を描いている。ほとんど『白記』のいうところであるが、上品中生の図相において『白記』巻七・二十丁オは「佛有二道光・光照二觸僧」と記すのであるが絵には二道の光が僧に向っている。そのような小さな相異はあるにしても、ここでは良定の図相を知る参考資料としてこの曼荼羅をあげることができる。

註

① この版本のうらにはつぎの文字が彫まれている。

奉刻彫當麻寺淨土曼陀羅所

右所志者先年夢中拜見弥陀尊三尊

在心不捨離縁之起此板漸成就了依此功

考此道報得脱同為七卅六親法界衆生同證

願以此功德平等施一切同發菩提心往生安樂國

寛永九年壬申正月廿五日願主京聚落三十郎
此執筆弁蓮社袋中良定(花押)

② 『白記』巻七、八丁ウ「殿中僧坐而披讀經二面前

有凡其傍有童子一人」

③ 『搜玄疏』巻七、四十二丁オ

④ 奉新寫當麻大曼陀羅一幅處／右旨趣者當寺塔頭有道心者／其名曰望譽林西昔日頼織／織絹無續目調一箇雖

欲畫變／像不果願望而往生彼人及滅／後吾住持此寺有

時林西後住／可圓以彼絹與我々思年來願／之今正此時

殊開山良定上人／此而作白記弘之像疏在一處／幸甚何

事如之雖余貧道力難／成且止而後有一檀那久堅固／信

心云自爲父崇觀久誓信士／母松觀貞壽信女克之予云漢

／土書曼陀爲追福先規出在唐／書宜哉大善根若余早寄

畫工／欲成之則下南京詠竹坊正俊／成就開山三十三年

遠思故掛／之修四十八日別時念佛講説／白記聽聞輩如

雲集令結縁畢／願以此功德施主滿現當二世

寛文十一辛亥年正月二十一日

時南都有信者二人後藤三郎衛門
同名與左衛門

惣寄進金物
朝陽山法林寺第八世／定蓮社良閑東暉(花押)

西阿（一六四七—一七一二）は現蓮社聲譽西阿といい、また助給とも称した。生涯を曼荼羅の弘通につとめた人である。その伝記は『當曼秘決直談鈔』卷十一に、附録としてあるが、それは西阿六十七才の時、弟子給阿が書きとめたものである。それによると、越中魚津の人で正保四（一六四七）年に生まれ、武州鴻巣の勝願寺念嘗から鹽書をうけ、また曼荼羅の指南を總州千住の源長寺称嘗からうけたという。以後曼荼羅の弘通につとめ、『當麻曼陀羅綱目秘決鈔』九卷（貞享四（一六八七）刊）、『當麻曼陀羅綱目秘決図彙正記』九卷（宝永五（一七〇八）刊）、『曼陀羅供略和讃』一卷（元禄十五（一七〇二）刊）、『當麻曼陀羅辨惑』三卷（正徳三（一七一三）刊）、『當麻曼陀羅秘決直談鈔』十一卷（享保三（一七二八）刊）など五部三十三卷を著わした。

その曼荼羅説法は多くの人々をひきつけたようであり、また寺院再興にも尽力した。その一つ信州須坂天徳寺にはその徳をたたえた「天徳寺再興略縁起」がある。かれの活動は浅草・小田原・伊勢の三つの称往院を中興し、清崎の善導寺まで足をのびし、その結縁の男女が市をなしたという。そのように曼荼羅を弘めた人であったが、當麻寺で曼荼羅を拝瞻しなかったであろうことは、自らも「嗚呼惜哉本曼陀羅舊不^{リテ}明^{カラ}矣新曼陀羅未^ハ許^ダ見^ル矣」と『秘決鈔』の序に述べることから推定できるし、後述する西阿発願の曼荼羅図相からも裏づけられる。ではどのような勉強をしたのか。これも指南をうけた源長寺称嘗のことがわからないので推測の域をでないが、『直談鈔』の巻末に給阿が「註記^ヅ爲^ニ秘決之指南^ト綱目^ト判段^ヘ概^ニ準^ニ白記^ニ也。西誉上人^ハ元來白旗之正統^{ナル}故^ニ以^テ曼陀羅鈔^ヲ偏^ニ備^ニ秘決鈔^ヲ依憑^ニ者也^ニ」と記すことから、証空・袋中・聖聡の三疏によった曼荼羅の理解をしたと考えられる。

西阿がいう正図はどのような図であったのか、それを知る資料として西阿の発願になる當麻曼荼羅図がある。

『秘決鈔』序に

貞享歲次丁卯季夏六月二十三日以_ニ拜寫_ノ圖_ヲ與秘決鈔_ト越後國頸城郡糸魚川於_ニ終南山善導寺_ニ寄_ニ附_シ住物_ヲ重_テ施_ス印行_ス者也。

という記事があるがそのとおり、縦横4×3メートルあまりの曼荼羅が現在でも善導寺に所蔵されている。その曼荼羅には絵を取り囲むように、この曼荼羅製作の寄進者六百余名が絵の上方は二段、下方は一段、左右三行にわたって書かれている。そして縁起段下の寄進者名のあいだに『秘決鈔』の序にいうとおりに、この曼荼羅の由来が十五行にわたって書かれてある。(この曼荼羅については『双魚』11号加藤諄「仏足石の人々」を参照されたい)

越後糸魚川 善導寺住持 現蓮社聲譽 謹拜寫富麻 曼陀羅變相 按三部鈔記 錄六卷秘蹟 永爲常住物

普備欣募緣 願以此功德 平等施一切 同發菩提心 往生安樂國 貞享四_丁歲 六月廿三日

酉阿がこの曼荼羅に寄進者の名を書かせていることは先にあげた「天徳寺再興略縁起」にいう結縁の男女が市をなしたという記事と同様であり、まさに曼荼羅弘通の人といえよう。

この曼荼羅の特徴は、画面が全体的に少したて長であること、縁起段は全文収録式でなく、拾字式であること、絵相は細密でとくに下縁部九品段の来迎菩薩聲聞衆の顔は女性的に描かれていることなどがあげられる。

この絵相を『秘決鈔』にのせてある絵相と比較すると、少しく相違する。上品において善導寺本には六天人が舞うのに対し、『秘決鈔』では一人であり、その部分の解説にも一人人と記す。下上品において、室内人の位置が『秘決鈔』では左から、僧・往生人・童子となるがそこでは往生人・僧・童子となっている。また『秘決鈔』に「二道光照_ニ家内_ノ男_ニ」とあるが、善導寺本にはその二道光がかかれていない。

これらの相違点は曼荼羅全体からすれば大変小さなことであるが、先に述べたようにこの『秘決鈔』と善導寺本

は一具のものとして西阿自身が寄附したものであるからその相異することは弘通の説教者としての西阿に許される範囲内であつたのであらうか。

註

①天徳寺什物。正徳五年、天徳寺第三世玄理の自筆。

一心山稱往院中興現蓮社聲譽西阿上人者當曼秘決之鈔主故曼陀圖彙正記類事變相弘傳之法將也著述雖近勸化流遠相州小田原一行山稱往院勢州宇治郷菩提山稱往院兼住三箇所常念相續之中興也特更越東清崎善導寺住職之時信州芋井善光寺參詣之節捧一部秘決鈔納一光分

○

義山（一六四八一七一一七）については、前述したところである。『當麻曼陀羅述要記』四卷は、知恩院第四十二世秀道の命をうけ、画業をよくする無塵居士とともに大和當麻寺に原本をはじめとする曼荼羅を拝瞻した上で、図相入りで元禄十六（一七〇三）年に出版されたものである。①原本をはじめとする諸本を比較の上、転写本がつくられ、それをもとに義山が解説を加えている。その過程で原本不明部分は文亀本・貞享本によつたのであるから、実際はほとんどばやけてしまつている原本よりも文亀本、あるいは転写されてまもない貞享本によつてその構図なり彩色がほどこされたといえる。その無塵居士の転写本は不明であるが、構図としてはこの『述要記』に転載しているのだから判断すると各構図は貞享本とほとんど同じであり、九品段にかぎつていえば全く同じといえる。

身、前ニ發ニ弘通、之願ニ欲ニ勸化、之廣ニ云云常清風、聞寶永三丙戌年三月上旬勸ニ上人、步行於坂田、草庵ニ冀ニ曼陀羅、之説法ニ請ニ秘決鈔之勸化ニ結縁之男女成ニ市、歸依、之道俗合ニ常……

② 卷五、五丁ウ
③ 卷五、十六丁オ

そのためこの『述奨記』は、聖聰の『疏』、良定の『白記』とともに広く読まれて後の曼荼羅研究に与えた影響は大きい。義山が生まれて三十年ほど後に生まれた貞極（一六七七—一七五六）^③なども高く評価するところであり、今日の的方法によって當麻曼荼羅図相の比較研究をした大順なども、九品段の図相説明ではこの『述奨記』の図をそっくりそのまま転載していることによってもわかる。しかし文龜・貞享といった新しい転写本をもとに転写したため、敬首（一六八三—一七四八）や忍海（一六九六—一七六一）などは、原本は文龜・貞享といった時代ではすでに九品段などの図相が不鮮明であるのだからそれより古い平安時代のもの、いわゆる恵心作と伝わる転写本による正しい転写本を作らなくてはいけない、と『述奨記』を批難している^④。

註

- ① 『述奨記』卷一、一丁オウ義山の自序による。
- ② 一箇所だけ相違する。上品の化仏数は義山は15とするが貞享本は16である。
- ③ 『四休庵貞極全集』巻下、174頁。
- ④ 敬首の解釈については塩竈義弘「当麻曼陀羅下縁九品段の絵相について」（『仏教論叢』17号）に詳しい。
忍海については『當麻変相考』（佛教大学蔵本）十二丁オ。

○

古碕（一六五三—一七二七）はその画業によってよく知られるところである^①。『當麻曼陀羅白記撮要』は貞享五（一六八八）年版と元禄七（一六九四）年版の二版がある。本書を著わした動機についてはその自跋に、良定の『白記』が難しいので、それをわかりやすくするために簡単な図をつけたといい、その真秘決は本書の述べるところでない、という。まさにその名のとおり「白記」撮要で簡便な編集になっており、半紙の下半分に図を描き、上

にその説明（『白記』の抄出）をのせるという形をとっている。

古碕の描いた當麻曼荼羅図は、津島の円成寺に現存している。それは『関通和尚行業記』卷上に、

享保十二年の秋の頃、殊勝の大曼陀羅を得らる。抑此曼陀羅は往昔華洛の無塵居士靈夢によりて岩倉山におい

て九色の彩土を感得せり。委しきことは義山上人の述契記にあり洛北報恩寺古澗（アヤ）和尚其彩具をもて。大曼陀羅四幅を畫く。今の聖

圖は其隨一なり。しかるに深き因縁ありて。右の大曼陀羅を勢州山田の清雲院よりゆづり受られける。今圖成

寺の曼陀羅堂に安置せるこれなり。

という因縁のあるものである。表装部分を含め方四米をこえるもので、五間四方の曼陀羅堂に安置されている。構図は貞享本とほとんど同じであるが彩色は全体的に淡く、特に緑青の色がその相違をはっきりさせている。これは貞享本と違い長年月掛けられていたためと思われる。

この他古碕筆と伝える當麻曼荼羅は二つ現存する。一つは鶴岡常念寺に伝わるものである。その裏には墨書で九行にわたり願文が記されている。

願　國土安穩／諸人快樂／二世悉地／佛子完長／願滿成就／法界衆生／離苦得樂／

于時寛保元辛酉天夏六月十五日／建立主　常念寺十三世定蓮社善譽完長代

方二米余、絵相はたて一・九四米、よこ二米である。これは古碕没後二十四年後に当山の所蔵になるものであるが、それを古碕筆というのは、『四休庵貞極全集』卷下、^③『當麻曼荼羅大意抄』の卷末の割注に

（印板當麻曼荼羅四ツ一　報恩寺古碕上人筆／出羽國庄内鶴ヶ岡常念寺什物　彩色古山新九郎筆）

とあるのによっている。

いま一つは獅子谷法然院に伝わるもので、その納函のふたの表には

大和州當麻寺西方聖境曼荼羅模圖沙門古澗筆

とあり、ふたの裏には

大和州當麻寺西方聖境曼荼羅模圖元禄壬午十五年
春正月二十一日 比丘湛堂寫 比丘□募緣
沙門古澗模圖畫工善丞填彩

とそれぞれ墨書きされている。方二米余、絵相の大きさは先の常念寺本と同一、さらにその構図も同一である。彩色は法然院本は貞享本と同様に緑色がよく映えているのであるが、常念寺本は青色を多く取り入れている。彩色は異なるが、大きさ、構図とも同一、どちらも古澗筆と伝えるが、この二本は実は両者とも黒谷西翁院に伝わる當麻曼荼羅の版木に彩色をほどこしたものである。それは七枚の板にその図相が彫られている。

よこ二・〇七五米、たて（上より）一九糎、二六・五糎、三一・二糎、二五糎、三五・七糎、三三糎、二七・七糎、厚さ四・七糎、七枚の板の裏すべてに、「清譽淨悦信士／法譽生蓮信尼」と二行にわたり彫られており、さらに第六枚目には「爲菩提／元禄十年」、第七枚目には「六月二十三日」と彫られている。結論的にいえば西翁院版木は古澗とは直接関係はないであろう。元禄十（一六九七）年といえは古澗が四十四才の時であり、もし古澗の手になるものであればそこになんらかの記載があってもよいであろう。また寺伝にも、古澗の伝記においても古澗と西翁院を結びつけるものはみあたらない。また『大意抄』にある割注はだれが記したのか不明で、常念寺においてもそれを古澗や古山新九郎に結びつけるものはなかった。また法然院本はその函書きのとおりとすれば版木ができ、五年後、古澗が四十九才の時のものといえる。しかし実際は函書きにあるように古澗が模図したものではなく、西翁院の版木を下絵にしてそこに填彩したものである。その証拠に、九品段部分においては刷り上げられた紙の下絵部分と、その上に張りつけられた絹地の部分にズレが生じて下絵がはみ出している。

これらの検討から確かに古澗の手になる曼荼羅は、円成寺所蔵の一本のみであるといえよう。

ところで円成寺本は先に述べたように貞享本の模本といえるのであるが、彼の著わした『白記撮要』はいわゆる古図の図相をもとに解説している。この新図・古図の相異については後に述べるところであるが九品段部分で決定的に違っている。三十五（貞享五）才の時は『白記』により『白記撮要』を書き、後には新図をもって正本とする彼の態度の変化は、義山との親交の変化によるものといえようか。

註

① 藤堂祐範「法然上人行状畫圖の弘傳に努めた人たち」

特に横井金谷について」『仏教文化研究』10号）参照。

② 浄土宗全書18卷234下～235上。

③ 1742頁。

敬首（一六八三—一七四八）は延享元（一七四四）年に當麻曼荼羅の講義をした。その講義録が『當麻曼陀羅正義講聴書』四卷で、弟子の忍海（一六九六—一七六一）が筆記したものである。それによると敬首は禪林寺に所蔵する模本を第一とした。^①序に、禪林寺の古変相によく似た曼荼羅を寛保三（一七四三）年に得ることによってその講義がはじめられたという。今その曼荼羅は伝わらない。

その弟子忍海は画業にすぐれた人であり、敬首の講義を聞き終わって三カ月後、実際に當麻寺をはじめ近畿諸寺に伝わる曼荼羅を拝瞻する。その記録が彼の著『當麻変相考』である。^②この忍海の描いた曼荼羅は獅子谷法然院に所蔵されている。方二米余、下縁下下品の左につきの識語がある。

當麻變相 發願主 淨業沙門 吟阿弥陀佛 喜捨衣 費新造
延享戊辰立春起筆至早秋成滿沙門忍海 拜画併書

延享三年というから敬首の講義を聞き『変相考』を書いた後であるから、それらの成果ふまえている、と考えてよ

いであるう。その図相は『正義講』によく一致する。

註

① 佛教大學圖書館藏、元卷、二丁ウ。

② 拙稿「忍海著『當麻變相考』について」(『仏教論叢』24号)

○

大基(一七八五—一八七〇)は『當麻曼荼羅略讚』を著わしている。名古屋建中寺の一代であり、教化布教に尽力したという。寺伝によれば他に『當麻曼荼羅講義』七卷ありとするが未見である。建中寺には大基發願になる當麻曼荼羅を所蔵している。^①

そのうらに墨書きで

德興山建中寺什寶／當麻大曼荼羅壺軸／發願主当山廿七世立譽大基上人／天保六年江戸ニテ完成 當山什寶トナル

とあることによりその發願を知るのであるが、それを納める函のフタうらにも四行の墨書きがある。

此大曼陀羅者予有宿願命江府弟子大道所造立也画工者神寶方御繪師川村某等拾八人天保六未春三月起筆同年六月廿三日成就同年七月表飾既成同年八月彼岸中開眼供養於傳通院山内／大佛殿點眼導師者知恩院宮院家至誠心院權僧正鳳譽鸞洲上人也然此事不計達 西丸御簾中御方之上聞同年八月被請 柳營内府公重相公御簾中御方拜瞻供養之一七日同年同月／被請 田安御殿重相公拜覽之同年十一月被請市谷御殿令至誠心院鸞洲僧正講釋之三箇日 黃門公日々親聽聞焉兩家衆初諸吏皆同拜見聽聞而后賜道中運送之／御證文自東街道入藏于當山維時天保六年未十二月十四日也

この曼陀羅は方四米に及ぶ大曼陀羅で、いわゆる新図をもとに描かれているものである。

註 ①この大曼荼羅は春秋の両彼岸会に開張されている。

三

前節で浄土宗において當麻曼荼羅研究書の著者にかかわる曼荼羅の所在を明らかにした。聖聰・演智・良光・貞極・文雄・大順・隋天・立禪・顯了といった人々にかかわる図相の所在は不明であるが、貞極はその図相を義山に依ることをいつているし、文雄・立禪はともに大順の図相を正本とする。このように整理すると、浄土宗内における図相の少なくとも半数以上は明らかにした。さらに前節では一部、九品段を例にとり、その図相と研究者との対応をみてきた。敬首・忍海のように両者がよく一致するものもあれば、酉阿のように少しく異なるものもあった。そこでつぎには、それぞれの絵相の間にどれほどの差異があるかを述べてみよう。この作業は、當麻寺の曼荼羅からの転写本相互の差異をみるのであるからどうしても重箱のスミをほじくるようなことになる。大順はあえてこの作業を行なっている。いまその作業の成果のなから、九品段の絵相を取り上げて比較してみたい。このような作業の場合よく九品段が取り上げられるが、それは原本が早くから不鮮明になっていたため、その部分は転写する人々の創意が多分に含まれており、そのため多様な図相を呈するようになったためである。

大順は『搜玄疏』巻七において九品段図相を新図・古図という呼び方でその系統を二分している。新図というのは文龜本が祖本となり転写されたもので、古図というのは恵心・聖聰・証空・袋中等の図であるという。これらの差異を四つに分けて巻七に述べる。その分類に従って、前節で述べた各依用本を比較すると次のようである。

図 相	人 名 寺 名	大 順 (古図)	西 阿 善導寺	〈独湛〉 (参考)	東 暉 檀王法林寺	(参考) 天徳寺	忍 海 法然院	伝恵心 法然院	大 順 (新図)	義 山 (述樊記)	大 基 建中寺	(不詳) 西翁院	古 彌 円成寺
来	上上	立	座	立	座	座	立	立	座	座	座	座	座
	上中	立	立	立	立	立	立	立	座	座	座	座	座
	上下	立	立	立	立	立	立	立	座	座	座	座	座
	中上	立	立	立	立	立	立	立	座	座	座	座	座
	下上	立	立	立	立	立	立	立	座	座	座	座	座
迎	放光	上上上中上下 中 上 下 上	上上上中上下 中 上 ナ シ	上上上中上下 中 上 下 上	上上上中上下 中 上 下 上	上上上中上下 中 上 下 上	上上上中上下 中 上 下 上	上上上中上下 中 上 下 上	ナ シ	ナ シ	ナ シ	ナ シ	ナ シ
	上上	安摺取印 (安摺)	安 摺	安 摺	安 摺	安 摺	安 摺	安 摺	転法輪印 (転法)	転 法	転 法	転 法	転 法
	上中	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	上下	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	安 摺	安 摺	安 摺	安 摺	安 摺
	中上	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃
	下上	〃	〃	〃	〃	〃	〃	〃	転 法	転 法	転 法	転 法	転 法
	下下品日輪相	上	上	上	上	上	上	上	下	下	下	下	下
引接	中 上 品	向 右	向 右	向 右	向 右	向 右	向 右	向 左	向 左	向 左	向 左	向 左	向 左
	下 上 品	ナ シ	ナ シ	ナ シ	ナ シ	有	有	有	有	有	有	有	有
	中 輩	声 聞	声 聞	声 聞	声 聞	声 聞	菩 薩	声 聞	菩 薩	菩 薩	菩 薩	菩 薩	菩 薩

人数及形相	室屋境莊器財												
	上上品室内	上上品化仏	中下品	下上品室内	下中品天蓋下	下中品	下下品	中下品	上下品	上上品	往行人	下上品	下下品
3人	16	2人	2人	2人	2人	3人	3人	3人	3人	3人	3人	3人	3人
一仏二声聞	一仏二声聞	一仏二声聞	一仏二声聞	一仏二声聞	一仏二声聞	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩
一僧二人	一僧二人	一僧二人	一僧二人	一僧二人	一僧二人	二僧一人	二僧一人	二僧一人	二僧一人	二僧一人	二僧一人	二僧一人	二僧一人
二女	二女	二男	二女	二女	二女	二女	二女	二女	二女	二女	二女	二女	二女
一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩	一仏二菩薩
15人	15人	15人	15人	15人	15人	15人	15人	15人	15人	15人	15人	15人	15人
縛女	縛女	縛女	縛女	縛女	縛女	縛男	縛男	縛男	縛男	縛男	縛男	縛男	縛男
垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室	垂簾一室
山なし	一盃石有	一盃石有	一盃石有	一盃石有	一石有	山あり	山あり	山あり	山あり	山あり	山あり	山あり	山あり
石あり	經案有	經案有	經案有	經案有	經案有	盃石なし	盃石なし	盃石なし	盃石なし	盃石なし	盃石なし	盃石なし	盃石なし
經案有	經案有	經案有	經案有	經案有	經案有	經案無	經案無	經案無	經案無	經案無	經案無	經案無	經案無
筥	筥	筥	筥	筥	筥	巾	巾	巾	巾	巾	巾	巾	巾
持串肉	持串魚肉	持串肉	持串肉	持串肉	有串魚肉	まな板の上で	まな板の上で	まな板の上で	まな板の上で	まな板の上で	まな板の上で	まな板の上で	まな板の上で
持引簾	持持数	持引簾	持引簾	持引簾	持引簾	持引簾	持引簾	持引簾	持引簾	持引簾	持引簾	持引簾	持引簾

以上検討の結果、そこにつきのような偏向性がみられた。

。大順が古図という恵心・東暉(良定)の古図派と義山の流れをくむ新図派とが再確認されたことである。古図派にはさらに独湛・西阿・敬首・忍海らがいる。新図派には古礪・大基などがいた。

。西阿は古図派に属しながらも善導寺本の絵相とその著書の『秘決鈔』に述べる記載の違いが指摘できた。そ

らに下上品において、善導寺本は放光がないが、『秘決鈔』にはある。善導寺本は引接相はないが『秘決鈔』では二菩薩が引接する。

。伝古礪筆といわれ、版木が西翁院にある曼荼羅の図相は大きさは異なるが円成寺本とよく一致した。

。大順がのせる古図は他のどの図相にも一致しないものがあつた。たとえば下下に描く犬を連れた人は、大順では人・犬ともに立姿に描くが、古図に分類される諸図では皆座している。上下品の岩・山についても同様である。中上品の僧は大順は合掌しているが他本はすべて経を持している。中中品において山や松を大順は描くが古図にはない。これらの諸点から、大順は新図は義山の図相を転載したものの、古図については自分で作製したと考えられる。

おわりに

本稿では、まず江戸期の代表的浄土宗の学僧の一人である義山および観徹を取り上げ、當麻曼荼羅がその宗典理解の一助となつていたことを述べ、それが『四帖疏』とのかかりであることに言及した。つぎに転写に関して、原本が早くから不鮮明なため、研究者たちの正図がそれぞれ異つていたことを述べた。

さらにそれを具体的に知るために、大順の研究を手がかりとしてその研究者にかかわる絵相の異りを明らかにした。それらの異相からどのような解釈が導きだされているのか、それに言及すべきであるが今後の課題としたい。

(佛教文化研究所助手)

付記

本稿を書くにあたり貴重な時間をさいて當麻曼荼羅図等の資料を心よく提示し、ご教導下された各寺院の皆様にお礼を申し上げます。